

第7期美幌町総合計画

基本構想素案

令和8年3月

美幌町

1章 はじめに

1. 第7期美幌町総合計画 策定の趣旨（案）

美幌町では、昭和41年に第1期総合計画を策定して以来、時代の変化に応じて総合計画を見直しながら、まちづくりを進めてきました。

人口増加期には生活基盤や公共施設の整備を中心に、人口減少局面においては、既存の基盤を活かし、人づくりや地域の力を重視するまちづくりへと転換してきました。

第6期総合計画の期間においては、全国的な人口減少・少子高齢化の進行、地域経済の構造変化、頻発・激甚化する自然災害、さらにはデジタル技術の急速な進展など、社会経済環境はこれまで以上に大きく、かつ複雑に変化してきました。こうした変化は、町の持続可能性や暮らしのあり方そのものを問い直す契機となっています。

また、地方分権の進展により、自治体にはこれまで以上に主体的な判断と創意工夫が求められる一方、行政だけで地域課題を解決することには限界があり、町民、地域団体、事業者、関係人口など、多様な主体との協働・共創によるまちづくりが不可欠となっています。

本町では、総合計画を「まちの憲法」と位置付ける美幌町自治基本条例の理念のもと、引き続き町民主体のまちづくりを基本とし、第6期総合計画の取り組みや成果を検証しながら、将来にわたって美幌町の魅力と住みよさを高めていくため、第7期美幌町総合計画を策定するものです。

第7期総合計画は、将来の不確実性を前提としつつも、町がめざす方向性を町民と共有し、時代の変化に柔軟に対応しながら、まちぐるみで実践していくための指針として位置付けるものです。

2. 総合計画の構成と期間

(1) 構成

第7期美幌町総合計画は、これまでと同様に「基本構想」「基本計画」「実施計画」の3層構造とします。

●基本構想

美幌町を取り巻く社会環境や課題を踏まえ、計画期間を通じて町がめざす将来像や、まちづくりの基本理念・基本目標を示します。

●基本計画

分野ごとに現状と課題を整理し、基本構想の実現に向けた施策の方向性を示します。

●実施計画

基本計画に基づき、具体的な事務事業を明らかにし、毎年度見直しを行いながら、計画の実効性を確保します

(2) 計画期間

第7期美幌町総合計画の計画期間は、令和9年度から令和20年度までの12年間とします。

●基本構想：12年間

●基本計画：4年間（町長公約との整合を図りつつ見直し）

●実施計画：3年間のローリング方式

長期的な視点と社会情勢の変化に対応する柔軟性を両立させるため、基本構想は中長期の指針として位置付ける一方、基本計画・実施計画については定期的な検証と見直しを行い、計画の実効性と時代適合性を高めていきます。

3. 美幌町の概要

(1) 位置・地勢

美幌町は、北海道東部のオホーツク総合振興局管内に位置し、東は網走市、南は津別町、西は置戸町、北は大空町に接しています。オホーツク海沿岸部と内陸部を結ぶ交通の要衝に位置し、周辺市町村との結びつきが強い地域です。

町域は、網走川水系の美幌川流域を中心に広がり、南西部には丘陵地帯、北東部には平坦な農地が広がっています。標高差が比較的緩やかで、農業生産に適した地形を有しています。町の象徴的な景観である「美幌峠」は、屈斜路湖を一望できる観光拠点として広く知られています。

(2) 自然環境・気候

美幌町は、四季の変化が明確な内陸性気候に属し、夏は比較的冷涼で、冬は寒冷かつ降雪量が多い地域です。冬期の寒さは厳しい一方、積雪は農地を保護する役割も果たしており、農業と自然環境が密接に関係しています。

周辺には屈斜路カルデラや森林資源が広がり、農地と山林、河川が調和した自然環境が形成されています。こうした自然は、農業生産のみならず、観光・レクリエーション、防災・環境教育の資源としても重要な役割を担っています。

(3) 交通

美幌町は、国道 39 号・243 号などの主要幹線道路が交差する交通結節点であり、網走市や北見市、弟子屈町方面へのアクセス性に優れています。特に網走市とは生活圏・経済圏としての結びつきが強く、通勤・通学・医療・買い物など日常生活の広域連携が進んでいます。

鉄道については、JR 石北本線が町内を通過しており、美幌駅は地域の重要な公共交通拠点となっています。一方で、人口減少や利用者数の減少を背景に、公共交通の維持・利便性向上が今後の課題となっています。

(4) 市街地

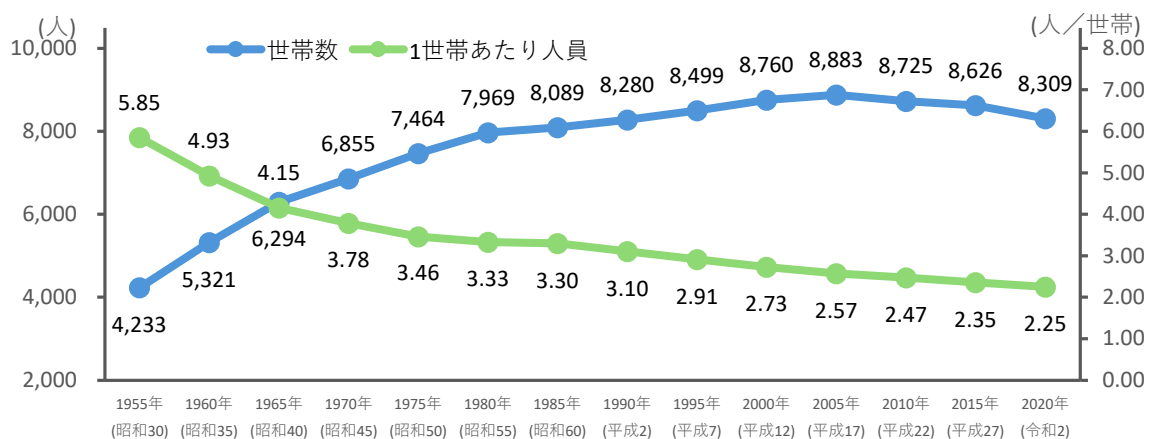
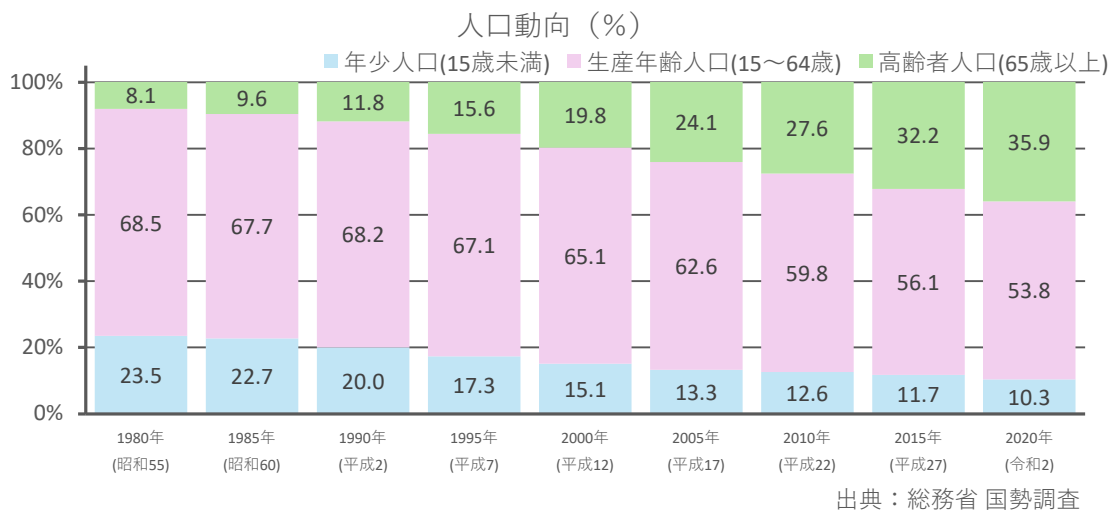
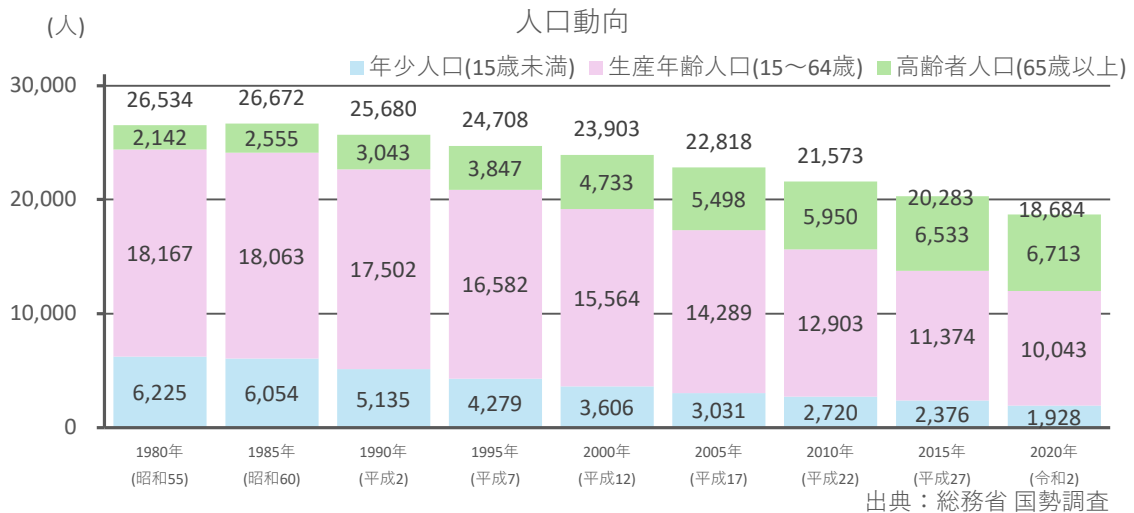
町の中心市街地は、美幌駅周辺を核として形成され、商業、公共施設、住宅が集積しています。一方、郊外部や農村部には複数の集落が点在しており、それぞれが農業を基盤とした生活を営んできました。

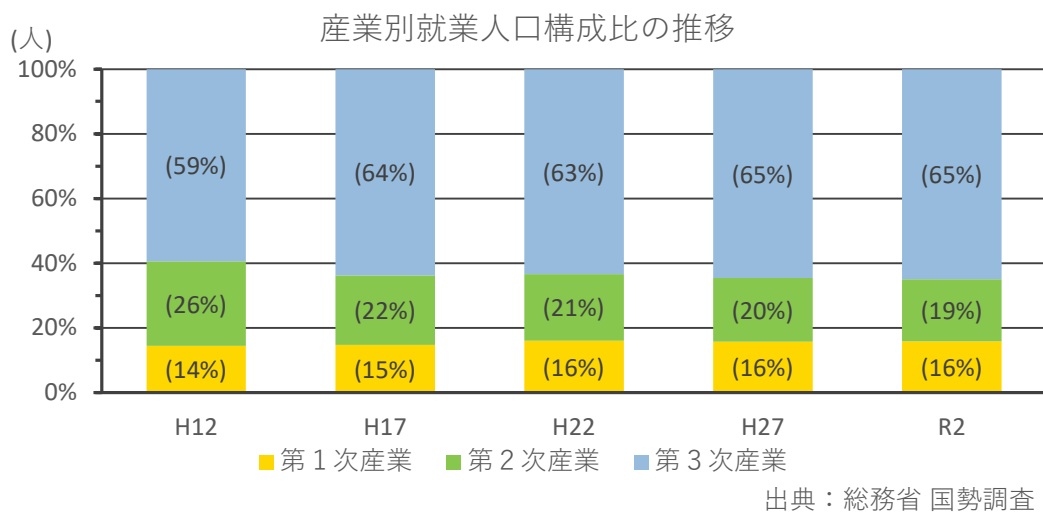
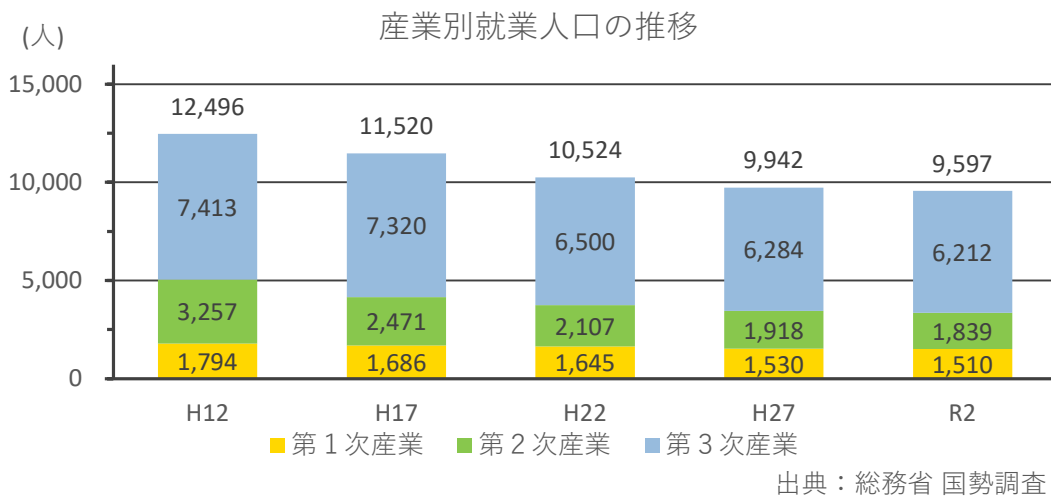
近年は、中心市街地における空き店舗・空き家の増加や、集落部における人口減少・高齢化が進行しており、生活利便性の確保や地域コミュニティの維持が課題となっています。中心と周辺の役割分担や、コンパクトで持続可能な町の構造づくりが求められています。

(5) 美幌町の人口

国勢調査によると、1923年に「美幌町」が誕生した後、人口は増加を続け、1950年には20,000人をこえました。1985年の調査では、最多となる26,686人となりましたが、その後は減少傾向に転じ、現在までその傾向が続いています。

年齢3区分人口については、65歳以上の人口が増加を続けており、2000年には年少人口（15歳未満）と老年人口（65歳以上）が逆転しました。





(6) 美幌町の産業

1) 農業

美幌町の基幹産業は農業であり、畑作を中心とした大規模農業が展開されています。小麦、てん菜、馬鈴しょ、豆類などを主力作物とし、北海道内でも安定した農業生産地域の一つです。

一方で、農業従事者の高齢化や後継者不足、農業経営の大規模化・効率化への対応など、構造的な課題も抱えています。スマート農業の導入や、農業と観光・教育との連携など、新たな価値創出が期待されています。

2) 商業・サービス業

商業は、中心市街地を中心に展開されてきましたが、消費行動の変化や大型店の立地、近隣市への購買流出などにより、従来型商店街の衰退が進んでいます。一方で、地域に根ざしたサービス業や小規模事業者は、生活を支える重要な存在となっています。

3) 観光

美幌峠をはじめとした自然景観や、周辺観光地への玄関口としての立地を活かした観光の可能性を有しています。しかし、観光は通過型が中心であり、町内での滞在時間や消費をいかに高めるかが課題となっています。

4. 考慮すべき社会背景

(1) 人口減少・少子高齢化

人口減少・少子高齢化の進行により、今後は地域社会を支える人口規模そのものが縮小していくことが避けられない状況にある。

国においても、社会を支える担い手が量的に縮小する社会の到来を見据え、これまでの成長や拡大を前提とした考え方から、限られた人材や資源の中で持続可能な地域を維持していく発想への転換が求められている。今後のまちづくりにおいては、人口増加を目的とするのではなく、地域の規模に応じた適切な機能やサービスを見極め、質を重視した地域づくりを進めていく視点が重要となる。

(2) デジタル化の普及とAIの活用

働く世代の減少が進む中、デジタルやAIの活用は、人材不足を補い、業務の効率化や省力化を図るための有効な手段となっているほか、行政手続や内部業務の効率化にとどまらず、医療・福祉、産業、防災、地域活動など、さまざまな分野での活用が求められている。あわせて、デジタルデバイドへの配慮や誰もが利用できる環境整備も重要となる。

(3) 安心・安全の確保

気候変動の進行に伴い、自然災害の激甚化・頻発化が懸念される中、防災・減災対策の強化が求められている。インフラの整備や維持管理に加え、地域コミュニティによる見守りや支え合いなど、日常的なつながりを生かした防災力の向上が重要であり、安心・安全な暮らしを支える基盤づくりが必要とされている。

(4) 行財政運営

人口減少や財政制約が進む中、行政がすべての役割を担うことが難しくなっており、住民、地域団体、企業など多様な主体が連携・協働し、共に地域を支えていく体制づくりが求められている。また、地方交付税の減少や公共施設の適正管理などにも対応しながら、持続可能な行財政運営を確立していく必要がある。

(5) 環境・エネルギー

2050年カーボンニュートラルの実現に向けて、再生可能エネルギーの導入促進や資源循環の取組が求められている。脱炭素の取組を環境対策にとどめるのではなく、地域資源の活用や新たな産業・雇用の創出につなげることで、地域経済の活性化や持続可能なまちづくりを進めていく視点が重要である。

(6) 多様性と共生

人口減少社会においては、地域内外の多様な人材や関係人口との関わりを広げるとともに、多文化共生やジェンダー平等の推進など、誰一人取り残さない社会づくりが求められている。

多様な主体がそれぞれの役割を担いながら、支え合い、活躍できる環境を整えることが、地域の持続性と活力の向上につながる。

5. 美幌町の今後のまちづくりの課題

町民アンケート結果や「びほろ」未来まちづくり会議での意見を横断的に整理すると、今後の美幌町のまちづくりの課題として以下のものがあげられます。

(1) 人口減少・少子高齢化への対応

町民アンケートおよび「びほろ」未来まちづくり会議では、人口減少・少子高齢化があらゆる分野の前提条件として挙げられており、子どもや若年層の減少、世帯規模の縮小により、学校・商業・地域活動の維持が難しくなっていることが指摘されている。

また、若者の町外流出やUターンの少なさ、「働く場」「子育て環境」「住宅支援」の不足なども課題として挙げられており、関係人口の創出を含め、若者が戻ってこられる仕組みづくりや、子育て世代が安心して暮らせる環境整備、定住促進に向けた取組が求められている。

(2) 地域経済の活性化

町民アンケートおよび「びほろ」未来まちづくり会議では、商店街の衰退や空き店舗の増加、農業をはじめとした基幹産業における後継者不足、商業・サービス業での人手不足など、地域経済の活力低下に対する懸念が示されている。

また、「農業を核とした6次産業化」「起業・チャレンジしやすい環境づくり」「観光との連携」などの方向性も示されており、新たな産業の創出や雇用の場の確保、地域資源を生かした稼ぐ力の向上が求められている。

(3) コンパクトなまちづくり・交通・インフラの維持

人口減少や高齢化が進む中で、空き家・空き店舗の増加や中心市街地のにぎわいの低下が進み、人口減少下でも成り立つまちの構造への転換が求められている。第3回「びほろ」未来まちづくり会議では、「にぎわいのあるまち」が将来イメージの中心に据えられており、交流・観光・商業・公共施設をつなぐまちなか再生の必要性が指摘されている。

また、JR無人化やバス路線の縮小などにより移動手段の確保が課題となっており、公共交通の維持、新たなモビリティの活用、歩いて暮らせるコンパクトな市街地形成に加え、道路・橋梁など生活を支えるインフラの確保・維持が重要となっている。

(4) デジタル社会・AIの活用への対応

人口減少や高齢化が進む中で、行政手続の効率化や住民サービスの向上に向け、デジタル化やAIの活用を進めていく必要がある。一方で、高齢者を中心にデジタル機器やオンライン手続への不安も想定されることから、すべての町民がデジタル化の恩恵を享受できる環境づくりが課題となっている。

そのため、行政手続のオンライン化や情報発信の充実を進めるとともに、デジタルデバイドの解消に向けた支援や、誰もが利用しやすい仕組みづくりを進めていくことが求められている。

る。

(5) 教育環境の整備

人口減少・少子化の進行により、児童生徒数の減少や学校を取り巻く環境の変化が進んでおり、将来にわたって子どもたちが安心して学べる教育環境の整備が求められている。町民アンケートや「びほろ」未来まちづくり会議でも、子育て・教育環境の充実を求める声が見られ、若者や子育て世代の定住にも関わる重要な課題となっている。

今後は、学校施設の老朽化への対応や ICT 教育の推進に加え、多様な学びの場や地域と連携した教育環境の充実を図り、子どもたちの成長を地域全体で支える視点が必要である。

(6) 地域コミュニティの維持・強化

町民アンケートでは、自治会や地域活動への参加者減少、担い手の高齢化・固定化が進み、「助け合い」や「つながり」が弱まっているとの意見が出されている。人口減少や高齢化が進む中では、医療・福祉、防災、日常生活の支え合いなどを地域で補い合う力がこれまで以上に重要となっている。

また、「びほろ」未来まちづくり会議では、「多世代交流」「つどいの場」「ウェルビーイング」といったキーワードも多く出されており、自治会加入率の低下や担い手不足に対応しながら、多様な世代が関わりやすい地域活動の仕組みづくりや、コミュニティ機能の維持・強化を図っていく必要がある。

6. これまでのまちづくりに関する評価

(1) 住みごころ

町民アンケートでは、「住みやすい」「どちらかといえば住みやすい」と感じている町民が8割を超えており、総合的な住みやすさについては高い評価が得られている。これは、防災・消防・救急体制の整備や上下水道などの生活インフラの充実、子育て支援や福祉施策の推進など、日常生活の安全・安心を支える分野において、これまでのまちづくりが一定の成果を上げてきたことの表れといえる。

一方で、町民アンケートでは、公共交通の利便性や買い物環境などに関する課題も挙げられており、特に高齢者や車を持たない世帯にとって、移動や日常生活のしやすさに不安が残る状況となっている。

(2) 将来の美幌町に望む姿

町民アンケートおよび「びほろ」未来まちづくり会議では、「子育てしやすいまち」「医療・福祉が充実したまち」「安心して暮らせるまち」「働く場所があるまち」など、生活基盤の充実に関する意見が多く出されている。また、町民アンケートでは自然環境の豊かさが高く評価されており、「自然環境が守られたまち」を望む声も多く見られる。

これらのことから、アンケートおよびワークショップの双方において、安心して暮らせる環境の充実とともに、雇用の確保や地域資源を生かした魅力ある暮らしの実現が重視されていることがうかがえる。

(3) 今後のまちづくりで特に重要と思うこと

町民アンケートでは、医療環境や国保病院の充実、子育て支援の充実、雇用の場の確保、公共交通の維持・確保、商工業の振興などについて重要度が高い一方で、満足度が十分に高まっていない分野として課題が挙げられている。また、「びほろ」未来まちづくり会議においても、医療・福祉や雇用、交通などに関する課題が繰り返し議論されている。

特に、高齢期の生活や通院に対する不安、若年世代の就労機会の不足に対する課題意識が強く見られるほか、地域コミュニティにおいても、担い手の高齢化や固定化、若い世代の参加のしにくさが指摘されている。こうしたことから、若者の定住促進や地域経済の活性化、移住・定住の促進などとあわせて、持続的な地域運営に向けた取組の強化が求められている。

2章 基本構想

1. 将来像

人口減少や高齢化が進行する社会状況のなか、美幌町の強みを活かしながら持続的に発展していく姿として将来像を設定しています。

将来像（案）

大地の恵みのなか、人が育ち、未来をつくる、誇れるまち びほろ

【考え方】

美幌町が培ってきた大地や水などといった地域資源は他の自治体にはない強みである。学びや地域活動を通じて人が育ち、産業によって未来がつくられ、地域に誇りを持つことができる暮らしの実現により、美幌町らしい価値を次世代へ確実につなぐことを示す。

<設定の経緯>

町民アンケート、まちづくり協議会、ワークショップなどでは、以下の内容の意見が多く出されています。

- 自然環境や農業・食といった美幌町の地域資源への誇り
- 人のつながりや暮らしやすさを大切にしたいという思い
- 将来への不安と「まだできることがある」という前向きな意見

一方、行政だけで課題を解決することが難しくなっている現状や、様々な場面での担い手不足、財政制約といった厳しい条件も明らかになっています。こうした状況を踏まえ、将来像では以下のことを重視して設定しています。

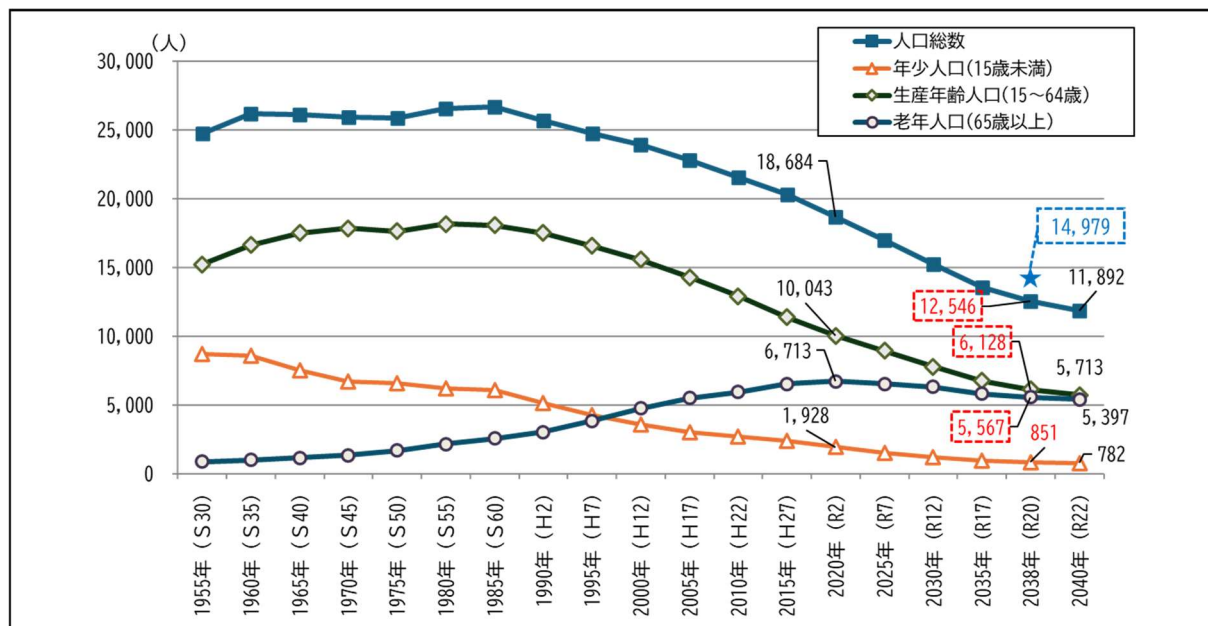
- 町民一人ひとりが役割を持ち、関わり続けられること
- 暮らし・仕事・子育て・学びが町の中で循環すること
- まちの魅力が内外に伝わり、関係人口を含めた多様な人が関わること

2. 人口の指標

大正 12 年に誕生した美幌町は、昭和 60 年の国勢調査時に人口が 26,686 人となったものの、以降減少傾向となり、今日まで続いています。

これまでの動向を踏まえ、今後の総人口を推計すると、令和 22 年には 11,892 人という推計になります。

この計画では、いつまでも暮らし続けられる取組を積極的に進めることとし、計画最終年次である令和 20 年の目標人口を 14,979 人とします。また、年齢 3 区分人口については、0～14 歳を 1,016 人、15～64 歳を 7,316 人、65 歳以上を 6,647 人とします。



	2010年 (H22)	2015年 (H27)	2020年 (R2)	2038年 (R20)
15歳未満	2,720	2,376	1,928	1,016
15～64歳	12,903	11,374	10,043	7,316
65歳以上	5,950	6,533	6,713	6,647
合計	21,575	20,296	18,684	14,979

3. 基本理念

基本理念は、将来像を実現するために、町民・事業者・団体・行政が共通して大切にしている価値観や姿勢を示すものです。『びほろ』みらいまちづくり会議では、「行政任せではなく、町民が主体的に関わることの必要性」「できる人が、できることに関わる仕組みが必要」といった意見が出されており、課題からはデジタル化・AIの活用の視点、多様性、豊かな暮らしを実現するまちづくりの視点なども重要と考えられます。

【設定の方針】

- 「(町民を主体としたまちづくりの視点)」
- 「(先進技術を活用したまちづくりの視点)」
- 「(多様な人々が暮らしやすいまちづくりの視点)」

4. 基本目標

基本目標は、将来像とまちづくりの基本理念を受け、各分野の目標を設定したものです。

安

基本目標1 時代の変化のなか、地域力を活かした共創による安心なまち

【考え方】住民と行政が共創する体制の構築。人口減少等により時代が変化しても、先進技術を活用して安心と信頼を支えるまちづくり。

- ・防災・医療・教育・行政サービス・DXを暮らしの基盤として一体的に捉え、制度や仕組みの充実に加え、住民同士や地域とのつながりも含めた「安心」を支える。
- ・住民と行政が共創する体制のもと、デジタル化や業務効率化を進めながら、災害や将来不安の軽減を図り、日常の中で「安定している」「任せられる」と実感できる、信頼される行政運営を目指す。



重点プロジェクト

紡

基本目標2 日々の暮らしやすさを紡ぎ、だれもが住み続けられるまち

【考え方】だれもが日常生活を維持できる環境。暮らしを支える仕組み、そして身近な見守りが自然と生まれる地域による、生活の不安や不便を感じにくいまちづくり。

- ・日々の暮らしやすさを支えるため、公共交通や生活サービスなどの仕組みを整えると同時に、地域の中で自然と見守りや支え合いが生まれる関係性を育むことで、誰もが安心して日常生活を維持できる環境を整える。
- ・人口減少や高齢化の進行を踏まえ、生活の不安や不便を感じにくい環境づくりを進めるとともに、地域と行政が連携しながら、誰もが住み続けられる持続可能な暮らしの基盤を形成する。



重点プロジェクト

協

基本目標3 日常のつながりを協働で育て、福祉につなげるあたたかなまち

【考え方】困りごとを行政や町民、事業所による地域全体で支え合う環境。人と人とのつながりの重なり合いにより、関係性そのものが福祉として機能する、あたたかなまちづくり。

- ・日常のつながりを協働で育みながら、行政、町民、事業所が一体となって困りごとを支え合う環境を整えることで、誰もが安心して暮らせる地域をつくる。
- ・人と人とのつながりが重なり合い、関係性そのものが福祉として機能する環境を育むことで、孤立を防ぎ、あたたかさを感じられるまちづくりを進める。



重点プロジェクト

産

基本目標4

農・観・商が連動し、新たな「産」が生まれ続ける活力あるまち

【考え方】農林業・商工業・観光が有機的につながり、新たな「産」を生み出す。人が集い、挑戦が生まれ、地域全体に活力のある経済を育てていくまちづくり。

- ・農業・観光・商業が有機的につながり、地域資源を活かしながら新たな「産」を生み出すことで、人が集い、挑戦が生まれる環境を整える。
- ・多様な主体の関わりにより、地域全体で価値を創出し続ける仕組みを構築するとともに、持続的に活力が生まれる経済の循環を育むまちづくりを進める。



重点プロジェクト

環

基本目標5 暮らしと環境が支え合うコンパクトで持続可能なまち

【考え方】コンパクト化による暮らしやすい都市構造の形成。中心市街地にぎわいを感じられる拠点形成とともに、資源が循環する仕組みを取り入れ、持続可能なまちづくり。

- ・人口減少を前提としたコンパクトな都市構造の形成を進め、生活に必要な機能の集約や中心市街地におけるにぎわいの創出により、暮らしやすい環境を整える。
- ・あわせて、環境負荷の低減や資源の循環を取り入れながら、暮らしと環境が支え合う持続可能なまちづくりを進める。



重点プロジェクト

輝

基本目標6 多様な学びで個性が輝き、未来に羽ばたく力を育むまち

【考え方】国際的な視野とふるさとへの誇りと愛着を併せ持つグローバル人材の育成。また、若者や高齢者まで、自分に合った学びが選択でき、誰もが輝く未来を描けるまちづくり。

- ・ふるさとへの誇りと愛着を持ちながら、国際的な視野を備えた人材を育成するとともに、地域と関わる学びを通じて多様な力を育む環境を整える。
- ・また、子どもから高齢者まで誰もが自分に合った学びを選択できる環境を充実させることで、一人ひとりの個性が輝き、未来に向かって挑戦できるまちづくりを進める。



重点プロジェクト